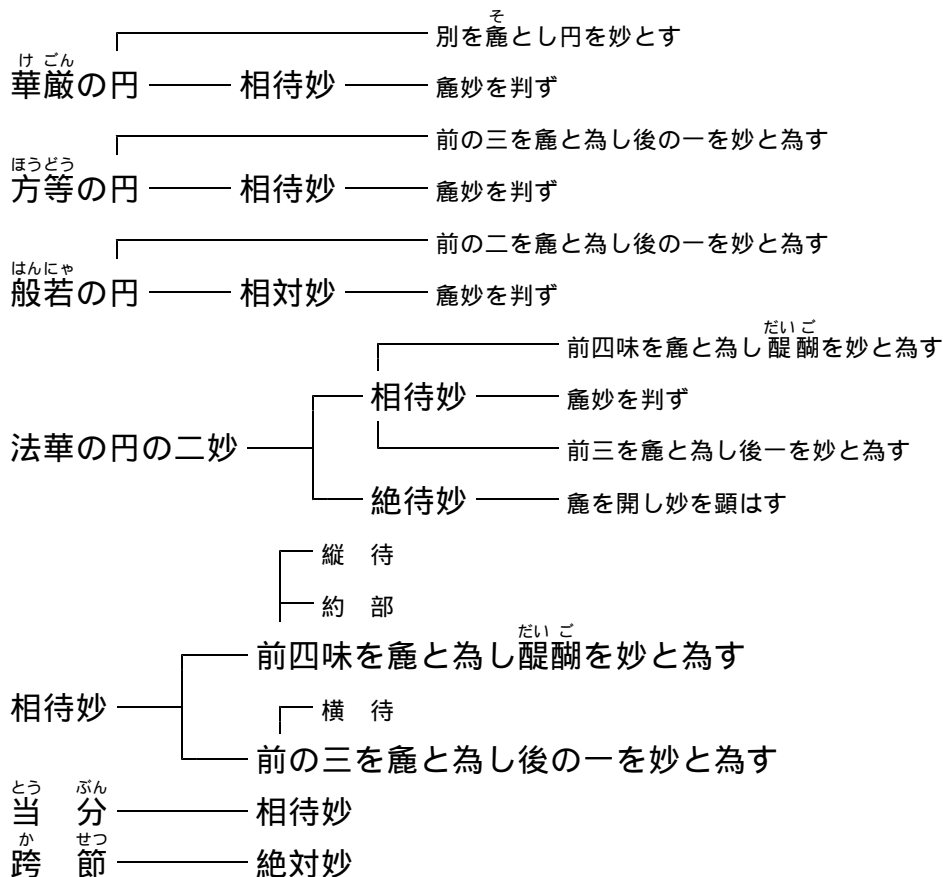


妙法蓮華經。

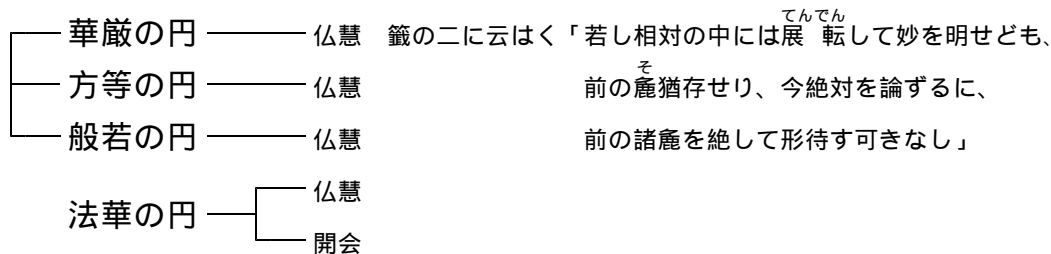
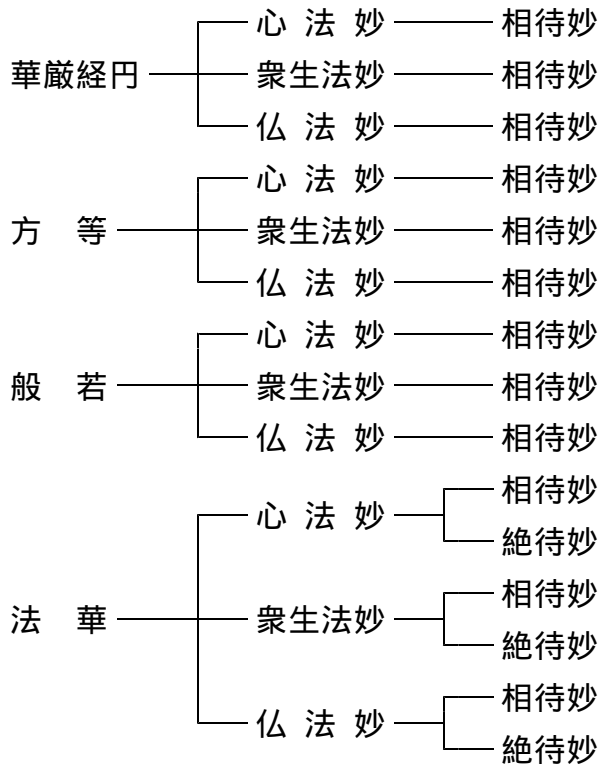
玄義げんぎの一に云はく「教相けうさうを經の一字三三と為す。一には根性の融不融ゆうふゆうの相、二には化導のしじゅうふしじゅう始終不始終おんごんふおんごんの相、三には師弟の遠近不遠近せんの相」と。

一に根性の融不融の相とは、籤せんの一に云はく「列中三意とは、前の両意は迹門に約し後の一意は本門に約す」と。又云はく「初めの根性の中に二と為す、初めには八教を明かして以て昔を弁じ、次には今經を明かして以て妙を顯はす」と。玄の一に云はく「云何が分別せん。日の初めて出でて先づ高山を照らすが如し 頓教の相と名づけ 乳味を出だす相なり。次に幽谷を照らす 此は三蔵の如し 漸教の相と名づけ 酪味の相と名づく。次に平地を照らす 此は浄名方等の如し 猶是漸教なり 生蘇味の相なり 復た義あり 具つぶさに大品の如し 猶是漸教なり 熟蘇味の相と名づく。復た義あり、日光普ことごとく照らして高下 悉どけいく均平なり。土圭をもて影を測るに縮しゆくならず盈えいならず。若しは低頭若しは小音若しは散乱若しは微善みぜん、皆仏道を成ず。人として独り滅度を得ることあらしめずして皆如来の滅度を以て之を滅度す。具に今經の如し。若し法を縁に被こうむらしむるに約せば漸円教と名づく。若し説の次第に約すれば醍醐味の相なり」と。又云はく「若し不定ふじょうを論ずれば義則ち然らず 此乃ち顕露不定なり」と。又云はく「秘密不定は其の義然らず」と。又云はく「復た甚はなはだ多しと雖も、亦漸頓不定秘密を出でず」と。又云はく「今の法華は是顕露にして秘密に非ず、是漸頓ぜんとんにして漸々に非ず。是合にして不合に非ず。是醍醐にして四味に非ず。是定にして不定ふじょうに非ず。此くの如く分別するに此の經と衆經の相と異なるなり」と。籤せんの一に云はく「初めに五味、次に不定、三に秘密、即ち八教なり。五味は即ち漸頓なるが故なり。漸の中に四を開し、不定等の二并せて即ち八と為すなり」と。籤せんの一に云はく「若し法を縁に被あわらしむるに約して漸円教と名づくと此の文の語は略なり。具足して応に云ふべし、鹿苑の漸の後に漸を会して円に歸す、故に漸円と云ふ」と。人之を見ずして、便すなわち法華を漸円と為し、華嚴を頓円為すと謂えり。華嚴の部の中に別あるを、乃至般若の中の方便の二教は皆法華の一乗より開出するを知らず。故に「一仏乘に於て分別して三と説く」と云ふ。故に疏しよに云はく「一仏乘に於て帶二帶三を開出す」と。今法華の部は彼の二三なし。故に「二無く亦三無し」と云ふ。又上に結して「華嚴は兼等此の經は復た兼但对帶なし」と云ふ。此見これ難きに非ず、如何ぞ固く迷へる。又今の文の諸義は凡そ一々の科、皆先づ四教に約して以て麤妙を判ず。則ち前の三を麤となし、後の一を妙と為す。次に五味に約して以て麤妙を判ず。則ち前の四味を麤と為し、醍醐を妙と為す。全く上下の文意を推求せずして、直ちに一語を指して便すなわち法華は華嚴に劣ると謂へり。幾許いくばくぞ誤るや幾許ぞ誤るや。又云はく「初の文は秘密に対せんが為なり。須く 此に準ずるに亦俱頓俱漸俱不定と云ふべし。文に無きは此亦略せり。既に俱黙俱説互ひに相知らず。之を名づけて密と為すと

云ふ。何ぞ俱頓互ひに相知らざるを妨げん」と。又云はく「不定と秘密と俱に互知と互不知とありて以て両異を弁ず。此の中の顕露も亦義余の七に通ず。秘は此の七を出でざるを以ての故なり。故に前の文に、顕露の漸頓及び顕露の不定と云ふ。故に七並びに是顕露の意なり」と。又云はく「文に今法華は是顕露等と云ふは秘密に対非す故に顕露と云ふ。顕露の七が中に於て通じて奪つて之を言へば並びに七に非ざるなり。別して与へて之を言へば但前の六に非ず。何となれば七が中に円教ありと雖も兼帯を以ての故に是の故に同じからず、此は部に約して説くなり。彼の七が中の円と法華の円と其の体別ならず。故に但六を簡ぶなり。此は教に約して説くなり。次に是漸頓にして漸々に非ずと言ふは具に前に判ずるが如し。今の法華経は是漸の後の頓なり。謂はく漸を開し頓を顕はす。故に漸頓と云ふ。法華の前の漸の中の漸に非ず。何となれば前には生熟二蘇を判じて同じく名づけて漸と為し、此の二経の中に亦円頓あり。今の法華の円と彼の二経の円頓と殊ならず、但し彼の方等の中の三、般若の中の二に同じからず、此の二と三とを漸の中の漸と名づく。法華は彼に異なるなり、故に非漸々と云ふのみ。人之を見ずして便ち法華を漸頓と為し華嚴を頓々と為すと謂へり。恐らくは未だ可ならず。是合等とは是開権の円なり、故に是合と云ふ。諸部の中の円に同じからず。故に非不合と云ふ。合とは只是会の別名なり。此即ち已に蔵等の四に約して以て権実を簡ぶに当たれり。故に復是円にして三に非ずと云はず。既に是法華の前の顕露に非ざることを知り已竟れば則ち法華は俱に七教に非ざることを了す、此即ち八教に対して簡ぶなり」と。



<sup>せん</sup>籤の二に云はく「当分は一代に通ず、今に於ては便<sup>すなわ</sup>ち相待を成ず。跨節は唯今經に在り、妙意は今に適<sup>かな</sup>ひたるに非ざるなり」と。玄の二に云はく「此の經は唯二妙を論じて更に非待非絶の文なし」と。此即ち初門の撰なり。故に二妙を須<sup>もち</sup>ひて以て三法を妙ならしむ。諸味の中に於て円融有りと雖も全く二妙無し。



玄の二に云はく「此の両妙を用ひて上の三法を妙ならしむ。衆生の法に亦是の二妙を具足す。之を称して妙と為す。仏法・心法に亦二妙を具す、之を称して妙と為す」文。籤の二に云はく「二妙をもて上の三法を妙にすとは、三の妙法華<sup>ほっけ</sup>に在りて方に妙と称することを得ることを明かさんと欲す。故に二妙を須<sup>もち</sup>ひて以て三法を妙ならしむ。故に諸味の中に円融ありと雖も全く二妙無きなり」云云。